

機 関 名	熊本大学		
拠点のプログラム名称	エイズ制圧を目指した国際教育研究拠点		
中核となる専攻等名	エイズ学研究センター		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 満屋 裕明 教授	外 10 名	
<p>【拠点形成の目的】</p> <p>本拠点は、国際的に活躍できる人材育成機能をより一層高めたエイズ制圧のための国際教育研究拠点を目指すものである。すなわち、博士課程大学院生を対象とした教育プログラムである「エイズ制圧を目指した研究者養成プログラム」と若手研究者を主な対象とした「AIDS Research Expert Training Program (AREP)」の2つのプログラムにより、エイズ基礎研究分野及びエイズトランスレーショナル研究分野で国際的に活躍できる次世代の研究者の育成と、抗HIV薬及びエイズワクチンの開発とそれらの開発のために必要なエイズの基礎研究及びコホート研究分野で、高度な研究を行う国際教育研究拠点を目指す。特に本拠点に所属する研究室の国際化、海外研究施設での海外リエゾンラボの設置、様々な教育研究支援プログラムによる国際的に活躍できる人材育成に重点を置く。</p> <p>【拠点形成計画及び進捗状況の概要】</p> <p>拠点形成計画：大学院博士課程における留学生を含めた競争的環境下での組織的・体系的な教育システムである「エイズ制圧を目指した研究者養成プログラム」（全て英語による授業・実習、複数の教員による研究指導、熊本エイズセミナーや国際学会での英語での発表の義務化など）と、「AIDS Research Expert Training Program (AREP)」（自ら研究を企画し実行して行く能力、海外の研究者と議論し研究内容を磨き上げる能力等の向上を目指したプログラム）の2つのプログラムにより、国際的に活躍できるエイズ基礎分野及びエイズのトランスレーショナル研究分野での次世代の研究者の育成を行う。これらの達成のため、熊本大学の本拠点に所属する研究室の国際化（国籍を問わず英語を堪能に話せるエイズ学研究分野の若手特任教員・研究員の採用、海外からの若手研究者・大学院生の研究プロジェクトへの参加、日本人博士大学院生の国際化教育）のための基盤を整え、また既に薬剤開発や免疫病態解析などの分野で共同研究や若手研究者の派遣実績がある米国NIHや英国Oxford大学の研究室等に海外リエゾンラボ (Overseas Liaison Laboratories:OLL) を設置し、若手研究者や博士課程学生が国際的な環境で研究が出来るようにする。さらにAREPプログラムで、適度な競争的環境下での教育研究の支援を行い、若手研究者が自らの研究を遂行する能力を向上・強化できるようにする。これらのプログラムを実現することにより、国際的に活躍できる研究者の育成と国際教育研究拠点化を行う。</p> <p>進捗状況：若手研究者の育成面では、大学院博士課程の「エイズ制圧を目指した研究者養成プログラム」は平成22年度で設置後4年目となり、この4年間で17名の大学院生（内外国人学生7名）がこのプログラムによるいずれかのコースに入った。このプログラムの科目は既にすべて開始され、順調に実施された。また、OLLでの博士課程学生の研究活動も開始された。一方 AREPでは、1) English Education Program（研究室やWeekly Young Investigator Seminarでの英語での発表と討論、Native Speakerによる英会話指導など、英語で発表し討論する能力を養う教育の強化）、2) International Meeting Exposure Program（熊本エイズセミナー、International Young Investigator Seminar、海外で開催される国際学会/国際シンポジウム等での研究発表）、3) International Lab Training Program（OLLへの大学院生・若手研究者の派遣と本拠点研究室への海外からの若手研究者の招聘による研究の実施）が行われ、若手研究者・博士大学院生の自ら研究計画を考え実行する能力と国際的環境下で議論する能力の育成を進めた。その結果この2年間で、大学院博士課程学生と若手研究者が1st authorの論文を多数発表し、NatureやJ.Virol等の国際誌に掲載できた。さらに7名の若手研究者・大学院博士課程学生が優秀な研究を発表したとして国際学会で表彰もしくはscholarshipを受けた。</p> <p>研究面では、この2年でOLLを設置した海外研究施設を中心とした国際共同研究が精力的に行われ、本拠点の設置後新たに開始されたものも含めて21の国際共同研究が進行中である。その成果として、エイズ免疫分野ではHIVの免疫逃避変異を持ったHIVの蓄積が証明され(Kawashima et al. Nature 2009)、またエイズ治療薬開発分野では新たに6種類の新薬候補のデザイン・合成・同定に成功した。うち1種類はサルでの前臨床試験段階に進んでいる。一方、本拠点内での共同研究も数多く行われ、既にこの2年間で拠点内の共同研究の成果をまとめた論文を国際誌に22報発表できた。</p> <p>このように2年間という短い期間であったが、国際的に活躍できる次世代の研究者の育成は順調に進行しており、この拠点を中心とした国際共同研究や拠点内の共同研究で多くの成果をあげており、国際教育研究拠点の活動は順調に展開している。</p>			

(総括評価)

現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される。

(コメント)

大学の将来構想と組織的な支援については、学長のリーダーシップの下に学内予算措置、教授ポストの増員、学内業務の軽減などの重点的支援が行われている。

拠点形成全体については、HIV感染症（エイズ）に特化した国際教育研究拠点として、「運営委員会」、「若手研究者育成委員会」、「国際研究委員会」及び「エイズグローバルCOE支援室」により計画にそって運営されている。米国国立衛生研究所（NIH）及び英国オックスフォード大学のリエゾンラボとの連携も有効に機能している。

人材育成面については、大学院学生の英語による講義・実習や海外リエゾンラボへの派遣により国際的人材育成の努力がされており、少数ではあるが基礎研究者が育っている。その結果、育成された若手研究者は博士課程学生の日本学術振興会の特別研究員への採用や海外学会での表彰など成果をあげている。一方、先進工業国で唯一HIV感染症が増加している我が国としては診療を担当する臨床医の育成も求められ、また、アジアの若い研究者の育成も期待される。

研究活動面については、新規の抗HIV薬の開発において世界をリードしており高く評価できる。一方、エイズワクチンの開発については、このままでは激しい国際競争に耐えられない可能性が高く、十分に検討したうえで計画を進める必要がある。

補助金の適切かつ効果的使用については、概ね適切である。

留意事項への対応については、ベトナムにおけるHIVのコホート研究の開始やジュニア・リサーチアソシエイト研究支援グラントの設立により、適切に対応している。

今後の展望については、「大学院先導機構」の下に大学としての継続的支援が予定されていること及び積極的に国際研究グラントを獲得していく姿勢は評価できる。